＜前回＞イエスの宗教運動から初期キリスト教へ

＜年表＞

前 4 以前：イエスの誕生
前 4：ヘロデ大王死
後 26-36：ユダヤ総督ポンティウス・ピラトゥス
　28 頃：洗礼者ヨハネ登場、イエスの受洗
　30 頃：イエスの十字架死
　32 頃：ステファノ殉教
　33 頃：パウロの回心
　47 頃：「主の兄弟」ヤコブ、エルサレム教会の長に。パウロの「第１回伝道旅行」
　48 頃：パレスチナ大飢饉、エルサレム使徒会議
　49-52 頃：パウロの「第２回伝道旅行」
　53-56 頃：パウロの「第３回伝道旅行」
　54-68 頃：ネロの在位
　56 頃：パウロ、エルサレムで逮捕
　61/2：パウロの処刑
　62：「主の兄弟」ヤコブの殉教
　64：ローマ市の大火、ペトロの殉教
　66 頃：エルサレム原始教会、ペラに（？）脱出
　66-70：第１次ユダヤ戦争
　70：エルサレム滅亡
　73：要塞マサダ陥落
　70 年代：パレスチナ・ユダヤ教はヤブネ体制を構築
　90 年代：ユダヤ教、（旧約）聖書正典を確立
　95 頃：小アジアでキリスト教迫害
　98-117：トラヤヌス帝在位
　132-135：第２次ユダヤ戦争（バル・コクバの乱）

（１）宗教運動の担い手たちにとってのイエス

さまざまな期待において理解されたイエス。預言者、メシア、神の子、イスラエルの王、ラビ・先生など　→　弟子集団の多様性・初期キリスト教の多様性

（２）初期キリスト教の歴史叙述＝キリスト教生成史

１．イエスの宗教運動からキリスト教会の形成まで
２．新約聖書の記述の歴史性
　・新約聖書はキリスト教共同体の文書であることをどのように考えるか。
　・キリスト教会は単一か？　単線的に展開したのか？
３．「本書においては「原始キリスト教」という偏見のない名称が選ばれる。原始キリスト教の境界線はどこに引かれるか、と問われねばならない」（コンツェルマン『原始キリスト教史』日本基督教団出版局、22 頁）、「境界線はおよそ紀元一〇〇年頃に引くことができる。もちろん、その変化は固定的なものではない。」（23 頁）
「原始キリスト教は統一体ではないのである。」（23 頁）
４．イエスの宗教運動あるいは初期キリスト教の多様性
　単線的な歴史像は後の再構成である。

（３）キリスト教起源神話：イエスの宗教運動から初期キリスト教へ

１．ルカ文書（80-90 年頃）と使徒言行録（90 年代）
「ルカの「神学」思想は、定められた神の計画によっていくつかの異なった時代を直線的

に進んで行く救済史の思想である」、「救済史の神学は、実は、新約の主要文書の中ではルカ文書（ルカ福音書と使徒行伝）にしか出て来ないものであり、特に「ルカ的」思想なのだ」（田川、404-405）

２．初期キリスト教の発展史的図式：イエス（30 年代）、パウロ（40-50 年代）

・イエスの宗教運動から初期キリスト教へ、エルサレム教会から異邦人伝道へ

一二弟子＝一二使徒／聖霊降臨＝教会／エルサレム教会・ペテロ／異邦人伝道・パウロ

・古代地中海世界へ：アンティオキア教会、パウロの伝道旅行・異邦人伝道

３．弟子たちの逃亡と復活のイエスの顕現

・ガリラヤ（マルコ、マタイ）かエルサレム（ルカ、ヨハネ）か。

「吾人はマルコおよびマタイに従って、ガリラヤ説を採る」（波多野、106）

ガリラヤへ逃亡した弟子たちへの顕現。

６．多様な弟子集団からパウロ的キリスト教へ

・ユダヤ的キリスト教、使徒会議(48/49)、ユダヤ戦争(66-70)

・ユダヤ戦争以降の状況が初期キリスト教とユダヤ教の分離・対立を引き起こした。

→　キリスト教のユダヤ教からの離脱

・パウロの異邦人伝道路線の線上における初期キリスト教

７．キリスト教の成立＝キリスト教起源神話の成立（パウロからルカ文書の間）

古代イスラエルの民族起源神話の改訂＝キリスト教起源神話への統合

古代イスラエルの正統な後継者としてのキリスト教

預言と成就、イスラエル民族から教会へ、旧約（旧い契約）から新約

↓　バートン・マック『誰が新約聖書を書いたのか』青土社。

一神教的伝統とイエスの神性の経験

（４）キリスト教の成立・まとめ

・キリスト教の成立は、「キリスト教の定義」によっていくつかの考え方が可能である。

イエスの宗教運動／ペンテコステ後のエルサレム教会／パウロ／

・・・／正統キリスト教の確立（４世紀）

１．キリスト教起源神話の成立＝キリスト教の成立

２．古代イスラエル民族との関連性：パウロ神学

預言と成就、旧約に対する新約、メシアとしてのイエス。

３．イエスの宗教運動との連続性：ルカ文書の意義、ペトロからパウロへ

パウロ的キリスト教の正統化、そこから歴史を描き直す（＝使徒言行録）。

↓

ユダヤ戦争以後、80 年代から 90 年代。

・「七〇年という年に、それまでのユダヤ教のいわば総本山であったエルサレムとその神殿体制が崩壊したとき、ユダヤ教イエス派は決定的な脱皮と独立の時期を迎えたのである。したがって、七〇年以降の同運動の姿を描くときから、「キリスト教」という言葉を使うことにする。」（佐藤、144）

（５）最初期のキリスト教の形

４．キリスト教の成立と展開の場としてのヘレニズム都市

ギリシャ語の世界へ　→　ギリシャ語による新約聖書の成立（１世紀後半）。

５．エクレシアという共同体

・エルサレムの共同体：ペンテコステ後（使徒言行録）

最初の教会における一致と対立：生活・愛の共産主義、ヘブライオイとヘレニスタイ

・パウロのエクレシア（コリント１）

６．家の教会と女性：

５．初期キリスト教の多様性とパウロ

（1）イエスの宗教運動の多様性

１．イエスの宗教運動からキリスト教会の形成まで

２．復活をめぐって

「イエスが一緒にいるのだと。それで、今ここでイエスから力強く神の王国を委ねられているということを説明する手段を見つけようと葛藤したわけです。その手段が、復活物語だったのです。」（クロッサン『イエスとは誰か』新教出版社、159）、「信仰を失ったからではなく、あの事件にもかかわらずどうして信仰を貫けるのか、そこを理解し説明しようとしたからです」（160）、「復活の日の事件をそのまま記録したという意味で史実かどうかといえば、史実ではない。けれども、キリスト教徒たちの中の時間経過を描いたという意味では、確かに史実なのです」、「自分たちの探していた手がかりを伝承の中に見つけた」（161）、「エマオの物語は事実ではありませんが真実です」、「復活とは、「イエスが一緒にいる」という体験に関するいつくもあり得る考え方のたった一つにすぎません」（162）、「支持者のうちでも、ガリラヤの農民たちはイエスが今もいることを素肌で知っていました。エルサレムの文人たちは聖書研究でイエスと再会しました。だから、復活というカテゴリーをパウロが使うのは、支持者と一緒に生き続けるイエスの力を語る手段の一つでしかないわけです」（164）、「信仰を劇で表現する手段」、「神の力がイエスを通じて、時間や空間に限定されず、誰でも今それを信じて体験する人の手に入るということが、私にとっては復活の核心です」（165）

３．イエスの宗教運動あるいは初期キリスト教の多様性

単線的な歴史像は後の再構成である。

・エルサレムとガリラヤ

マルコ福音書の弟子批判：「マルコとしてはまさにペテロを中心とする十二弟子の権威を批判することを目的として福音書を書いているのである。」（田川、29 頁）

マルコ 1.36, 8.33, 13.3../37../66..

・ヘブライオイとヘレニスタイ

荒井「エルサレム教団におけるいわゆる「ヘブライオイ」と「ヘレニスタイ」の問題をめぐって――使徒行伝６章１―６節に関する教会史的考察」

「エルサレム教団には当初から思想的に相異なる二つのグループが存在していた。第一のグループは、ユダヤ教の伝統に拠って福音を理解し、ユダヤ主義に傾く宣教活動を行っていた」（66-67）、「おそらくはこのグループが主流派を形成していた。これに対して、ステパノによって代表される非主流派が存在した。このグループはおそらくガリラヤにおける初期の自由な、異邦人に対しても開放的な宣教の担い手に遡源するであろう」（67）、「ルカの救済史観によって再構成された歴史像」（69）

・マック「この初期の時代から、イエスの追従者たちの五つの異なるグループ」

「語録福音書Ｑ」を生み出した「Ｑの共同体」／マルコ以前の宣教物語を生み出した「イエス派」／「トマス福音書」を生み出した「真の弟子たち」／マルコ以前の奇跡物語のセットを著した「イスラエルの会衆」／「エルサレムの柱たち」（『誰が新約聖書を書いたのか』青土社、74 頁）

４．キリスト教はいつキリスト教になったのか？　キリスト教とは何か？

イエス／パウロ／パウロ以後

５．キリスト教の成立＝キリスト教起源神話の成立（パウロからルカ文書の間）

古代イスラエルの民族起源神話の改訂＝キリスト教起源神話への統合

古代イスラエルの正統な後継者としてのキリスト教

預言と成就、イスラエル民族から教会へ、旧約（旧い契約）から新約
↓　バートン・マック『誰が新約聖書を書いたのか』青土社。
一神教的伝統とイエスの神性の経験

（２）聖書学的観点から

６．多様な弟子集団からパウロ的キリスト教への展開は、歴史的状況に規定されたパウロ以降に起こった事態である。
・ユダヤ的キリスト教、使徒会議(48/49)、ユダヤ戦争(66-70)
・ユダヤ戦争以降の状況が初期キリスト教とユダヤ教の分離・対立を引き起こした。
→　キリスト教のユダヤ教からの離脱
・パウロの異邦人伝道路線の線上における初期キリスト教

７．ペンテコステの意義：ルカ的な「救済史の神学」の内部に位置する（？）
言語の多様性　→　民族の多様性とキリストにおける統一＝世界宗教

（３）パウロ伝承と歴史的パウロ

８．資料
1)使徒言行録：90 年代
2)パウロ書簡:第一テサロニケ、ガラテヤ、フィリピ、フィレモン、第一コリント、第二コリント、ローマ
3)二次的パウロ：第二テサロニケ、コロサイ、エフェソ、牧会書簡（第一第二テモテ、テトス）

９．パウロの思想的背景：ヘレニズム・ユダヤ教と都市
様々な思想的な文脈が交差している。ギリシア語訳聖書の存在。
30 頃:エルサレム教会の成立　66:ローマの大火事、皇帝ネロのキリスト教迫害
66-70:第一次ユダヤ戦争（132-135:第二次）

10．迫害者から異邦人への使徒への回心（復活のキリストとの出会い）
↓
地中海世界の伝道旅行、都市から都市へ伝道するキリスト教徒と存在
急速な拡大（点から点へ）

11．小アジア南東隅付近の町タルソ出身のユダヤ人。イエスと同じ頃の誕生。没年は 62 あるいは 63 年という説。主たる言語はコイネー・ギリシャ語、都会人、中産階級に属する教育を受ける。天幕作りの職（使徒言行録 18.3）
前半生はパリサイ派（復活を信じる）。
パリサイ派のガマリエル一世に師事（使徒言行録 22.3）は伝説・推測。
イエスの弟子集団を迫害。しかし、詳細は不明。
回心は 33 歳頃→異邦人を回心させるという特別な使命の自覚

12．論争：エルサレム教会とユダヤ的なキリスト教（あるいはユダヤ教イエス派）
律法遵守は救済の条件か、救われるためにはユダヤ人になる必要があるか

（４）パウロの意義と新しいパウロ論

パウロ的キリスト教が現代に至るキリスト教の基盤となる。

13．普遍宗教・世界宗教キリスト教への道
民族性を越えて世界へ、市民社会のキリスト教への道？

14．西洋的キリスト教会の神学的基盤としてのパウロ
パウロへの反発・パウロ批判

体制的イデオロギーの代表
↓
新しいパウロ解釈：1980 年代以降
体制派パウロから戦うパウロへ
政治哲学におけるパウロへの注目

「パウロの神学の社会革命をひき起こす潜在力を秘めていた」「ユダヤ人と異邦人の一体化」（サンダース、24）

「レーニン主義者パウロ」「アウトカーストの共同体」「無制約的な普遍主義への関係にもとづいて形成された戦う共同体」（ジジェク『操り人形と小人』青土社、195）

「そこではもはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです。」（ガラテヤ 3:28）

15．パウロ的教会（エクレシア）とは何か。

（６）パウロと政治哲学

Protestant interpreters have traditionally understood Paul in opposition to Judaism. Luther...

This approach to Paul that has dominated NT studies for generations is based on the unquestioned and distinctively modern Western assumptions that Paul is concerned with religion and that religion is not only separate from political-economic life, but also primarily a matter of individual faith.（Horsley, 1）

in the aftermath of the Holocaust

the great hero of faith who articulated foundational Christian Theology was discovered to share the same fundamantal "covenantal nomism" of Judaism,

Paul's new religion of personal faith was no longer seen as sharply opposed to Judaism.（2）

16．ローマ帝国のイデオロギー

Focus on the Roman imperial order as the context of Paul's mission, however, is leading to another recognition. Instead of being opposed to Judaism, Paul's gospel of Christ was opposed to the Roman Empire.

That Paul's gospel opposed the Roman imperial order, not Judaim, becomes increasingly evident the more we reexamine principal facets and key terms of his gospel,as evident in virtually all his letters. In 1 Thessalonians, from beginning to end, God's kingdom and the true Lord, Jesus Christ, are opposed to the Roman Empire and its ideology of "peace and security, " which stand under the imminent destruction of God's judgement（1:10; 2:12; 3:13; 4:14-18; 5:1-11, 23）. In 1Corinthians, from Paul's first long argument to his ecstatic "explanation" of the ressurrection, Paul opposes his gospel to the Roman rulers and the imperial order.
2:6-8, 1:26-27; 4:8-10, 6:1-4; 7:31, 15:24, 2:9, 3:19-21（3-4）

Moreover, just as Paul's gospel of Christ as Lord evidently stood opposed to the Roman imperial order, so the local representatives of that imperial order evidently opposed Paul and his assemblies.（4）

Recent constructions of "the social world of the apostle Paul" have perpetuated the standard view that the *pax Romana* provided a benign context for the Pauline mission and rise of "Christianity."（6）

Political stability may have prevailed in the cities where Paul carried out his own distinctive mission, but that stability imposed by the Roman imperial order surely meant insecurity for many

if not most urban people.（9）

17. パウロとユートピア
　被造物全体の救済、ローマ帝国の環境破壊のイデオロギーに抗して
 Robert Jewett, The Corruption and Redemption of Creation. Reading Rom 8:18-23 within the Imperial Context.（25-46）
　Jacob Taubes　Paul's "political theology" as "a political polemic against the Caesars,"（25）

＜参考文献＞

１．コンツェルマン『原始キリスト教史』日本基督教団出版局、『時の中心――ルカ神学の研究』新教出版社。
２．佐藤研『聖書時代史　新約篇』岩波書店。
３．荒井献『イエスとその時代』岩波新書、『イエス・キリスト』講談社、『原始キリスト教とグノーシス主義』岩波書店、『使徒行伝　上中下巻』新教出版社、1977/2014/2016年、『新約聖書の女性観』岩波書店。
４．田川建三『イエスという男』三一書房・作品社、『書物としての新約聖書』勁草書房、『原始キリスト教史の一断面』勁草書房。
５．ジョン・ドミニク・クロッサン『イエス　あるユダヤ人貧農の革命的生涯』新教出版社。
６．青野太潮『最初期キリスト教思想の軌跡　イエス・パウロ・その後』新教出版社、2013年。
７．土戸清『初期キリスト教とユダヤ教――ヨハネ福音書研究の諸課題』教文館。
８．土屋博『教典になった宗教』北海道大学図書刊行会。
９．Ｃ．キー『初期キリスト教の社会学』ヨルダン社。
10. 秦剛平『乗っ取られた聖書』京都大学学術出版会。
11. Ｇ・タイセン『新約聖書――歴史・文学・宗教』教文館。
12. Ｇ・ボルンカム『パウロ　その生涯と使信』新教出版社（原著1969年）。
13. Ｅ・ケーゼマン『パウロ神学の核心』ヨルダン社（原著1969年）。
14. Ｅ・Ｐ・サンダース『パウロ』教文館（原著1991年）。
15. 荒井献編『パウロをどうとらえるか』新教出版社、1972年。
16. 佐竹明『使徒パウロ　伝道にかけた生涯　新版』新教出版社、2008年。
17. ボーグ『イエス・ルネサンス』教文館。
18. 芦名定道・小原克博『キリスト教と現代――終末思想の歴史的展開』世界思想社。
19. バートン・Ｌ・マック『失われた福音書――Ｑ資料と新しいイエス像』、『誰が新約聖書を書いたのか』、『キリスト教という神話――起源・論理・遺産』青土社。
20. 松永希久夫『歴史の中のイエス像』ＮＨＫブックス。
21. フィオレンツァ『知恵なる神の開かれた家』新教出版社。
22. 清水哲郎『パウロの言語哲学』岩波書店。
23. ヤーコプ・タウベス『パウロの政治哲学』岩波書店。
24. アラン・バディユ『聖パウロ――普遍主義の基礎』河出書房新社。
25. ジョルジョ・アガンベン『残りの時――パウロ講義』岩波書店。
26. 宮田光雄『国家と宗教』岩波書店。
27. Richard A. Horsley（ed.）, *Paul and the Roman Imperial Order*, Trinity Press International, 2004.
28. David G. Horrell, *An Introduction to the Study of Paul*（Third Edition）, T & T Clark, 2015（2004）.
29. Dieter Georgi, *Theocracy in Paul's Praxis and Theology*, Fortress Press, 2009.